

32 『空襲救護』について

○谷津 三雄・渋谷 鉦

本書は二・五×一八cm大、二二六ページで、昭和一八年五月二〇日初版発行、七〇〇〇部、同一九年一月一日再版発行一〇〇〇〇部、金二円一七銭で、帝国女子医専報国団編、昭和刊行会より発行されていた。編輯は赤須文男、小島 博、額田 年である。赤須文男の緒論のはじめに「従來の戦争では所謂第一戦に於てのみ戦闘が行はれてゐたが、航空機の発達は戦争の様式に大變革を來し、國內の各地は所謂空襲の危険にさらされるやうになつた」から本書の『空襲救護』の書名になつたと思われる。「最後に空襲の最も恐るべきは、その精神に及ぼす影響であると識者は論及してゐる所謂デマは非科學的に傳搬され、戦に於て、自らを敗者とせしめる事は古今の歴史の實證する所である。デマを放散するもの、又之

を信ずる者は等しく精神の不健康者である事は言を要しない。是等の人々に對する處置は日常の正しい防空精神の練成に在る事は勿論であるが、自信のある救急處置を知得して置く事も亦是等精神不健康者の發生を抑制せしめ得る一端たり得るものと思ふ。」と結んである。

目次から本書の内容と執筆者をみると、「第一編 防空方法要綱、森 信胤、第二編 傷病者救急看護避難法 第一章 擔架運搬法、額田 年、第二章 重症患者、傳染病患者の避難、米山彌平、第三章 妊産婦の避難、赤須文男、第四章 一般空襲時に於ける小兒の避難、矢吹舜、附 急病の應急處置、米山彌平、附 人工呼吸法、杉原仁彦、第三編 爆彈及び焼夷彈、第一章 爆彈の常識、額田 年、第二章 焼夷彈の常識、額田 敏、第三章 爆彈焼夷彈、奥田久司、第四章 爆彈投下によつて發生する外傷とその救急法、小島 博、第五章 火傷の救急法、石津 俊、第六章 眼の外傷、須田 經宇、第四編 毒瓦斯、第一章 毒瓦斯の種類とその性状、奥田久司、第二章 毒瓦斯の防護法、第三章 毒瓦斯の救急法、第一項 内科的方面、杉原仁彦、第二項 眼科的方

面、須田 經宇、第三項 皮膚科的方面、石津 俊、第

著の記載はない。

五編 家庭常備救急品、第一章 家庭常備薬品、清水藤太郎、第二章 家庭常備救急器具、小島 博」である。

(日本大学松戸歯学部)

なお、本書が出版された昭和一八年は二月一日日本軍ガダルカナル島撤退開始、四月一八日海軍大将山本五十六南方空中において戦死、一〇月二一日徴兵延期停止のため出陣の壮行会を神宮外苑で挙行、一月二七日カイロ宣言、一二月三日テヘラン宣言、昭和一九年七月五日サイパン島陥落、七月一八日北九州初空襲、一〇月一八日徴兵適令を一八歳に引き下げる。一月二四日レイテ島陥落、一月二四日サイパン発進によるB二九による東京の初空襲、翌二〇年三月一〇日は東京大空襲で、江東地区全滅、二万三戸消失、三月一四日大阪初の大空襲により市の中心部一三万戸消失、四月一日米軍沖繩本島に上陸、八月八日ソ連対日宣戦布告、八月一五日終戦などの状況から本書の緒論の結びから理解できる。

なお、本書が出版された昭和一八年と同一九年の刊行物を中野 操著『日本医事大年表』の文献欄から救急医学についてみると橋爪恵著『戦陣医学』があるのみで本